

nakcazawa

『ジェンダー表現ガイドブック』の第2回プレゼン（尾崎・川端・土屋）に関するスレッドです。シリアスで難しいテーマながら、今回も随所に細かい工夫がされていたプレゼンだったように思います。皆さんのコメントをお願いします。

籠谷郁吹

今回もジェンダー学についての話でしたが、前回よりも噛み砕いての説明が多くより一層理解が深まることができた。

改めてジェンダー学を知れてよかったと思えました。

つちやよしき

発表者として、もっとグループワークを入れた方がもう少し寄り添ったものになったのかなと思った。また、グループワークの問いがちょっと考えにくい、とっかかりが少なくなってしまったかなと思った。古代ギリシャの神聖隊や江戸時代の衆道文化のような男性同性愛は、子供をなすことと性行為を楽しむことが分離されていたという社会背景があるのもあってのことだが、世界中で歴史的によく見られるので、むしろ今の「同性愛は自然ではない」という考え方の方が後から生まれたものなのだなと思った。

川端 真由

グループワークの内容や入れどころが微妙だったため、これからプレゼンの流れが良くなるように工夫したい。

今回は特に表現の仕方や語彙力のなさを感じたのでできるだけ改善したいと思う。

尾崎星太

準備不足でジェンダーについて深掘した話ができなかった点を反省している。

棗田進太郎

この 2 週でジェンダーについて深く考えることが出来た。もし自分がこの話題についてプレゼンをするとなるとなかなか難しいと思うので、してくれた人達はすごいなと感じた。

西川茉里

ジェンダー問題については、言葉をいつもより慎重に選ぶ事に気づきました。とくに LGBT の話は以前からよく調べたりしていたので非常に学びになりました。日本は性別に関してはるか昔からの慣習を守り続けているところがあると思います。ジェンダー問題がなかなか進展しないのはその部分も原因の一つであると考えました。

増田光樹

すごく言葉に気をつかってプレゼンをしていた風を感じた。グループワーク中にふとした昨今のジェンダー問題についての質問をしても、すぐにプレゼンメンバーが答えてくれていて、本の内容以外にもしっかりリサーチし理解を深めているのが伝わった。

高本恭吾

この 2 回のプレゼンですごく感じたことは、選択の幅を広げることの重要性であった。

土屋くんの話から、同性愛というのが重要視されるべきだということが、改めて理解できた。

同性婚が認められている国もある中、それが認められていない日本では、同性愛を求める人々の自由を制限することになっていると感じる。

同性婚が認められることによって、今の日本でのマジョリティーの側に立つ人々は、何か危害を受けるということはないと思う。そのため、他者危害原則の観点からも、同性婚は認められるべきであると僕は考える。

今の日本が個人の権利を尊重する社会を目指すのであれば、その第一歩としても、同性婚を認め、一人でも多くの人が個人の自由を保障された、各人が生き方を選択できる社会というのが、目指されるべきではないかと考える。

三木美裕理

今回のプレゼンはとても丁寧な印象を受けた。ジェンダー問題を深く考えすぎると余計に答えが出にくくなるため、いろんな選択肢があると思うと少し軽く感じることもできると思った。

崎山綾香

ジェンダー問題はとてもセンシティブな話題なのでプレゼンが難しそうだったが、言葉を選んで発言していたのが印象的だった。本の内容以外にも触れていたのも、ジェンダー問題を深く知ることができて良かった。

白澤卓也

LGBT など、知ってそうでちゃんと知らないものを再確認できてよかった。日本にはまだまだジェンダー問題がたくさんあるのかなと感じた

中井 美裕

性別の話や同性婚の話など、まだまだ課題があったり認められないことを再認識しました。ジェンダー問題を深く考えられたプレゼンでした。

金山恵大

今回のプレゼンテーションでは、資料などが配られ、日本のジェンダー問題に対する立ち位置はどのくらいなのかを理解することができた。

清水陸人

今回は、また違う視点からジェンダーについて考えることができました。日本だけでなく、世界のジェンダー問題についても理解することができました。

nakcazawa

自分がゼミ生ならどんなふうにプレゼンするだろうか、ということを想像しながら、観察していました。センシティブな話題なので、どこまで深掘りするべきか、難しいところですが、僕としては（最近よく耳にする）「ルッキズム（外見至上主義）」の問題に触れることができれば、もっと議論が広がったのではないか、という気がします。かつて 3 期生で初めてジェンダー問題を扱った時、容姿の美醜の問題が特に大きな議論になり、テキストの提案者である 3 期ゼミ長の F さんは卒論までこの問題を追いかけてきました。これは「人生における理不尽さはどう向き合うか」という別の問題とも関連します。

高本くんのコメントには全面的に賛成します。

また、土屋くんのコメントに関連して、こんな本を紹介しておきましょう。

<https://www.kinokuniya.co.jp/f/dsg-01-9784480061874>

「恋愛結婚」「一夫一妻制」などが明治期の発明品であり、歴史的にきわめて新しく、それが「あたりまえ」でなかった時代のほうがはるかに長かったことを、」 私たちに教えてくれます。中澤ゼミのテーマは「あたりまえを問いなおす」なので、身近な男女関係のあたりまえを問いなおすことができたという意味で、今回のテーマは中澤ゼミの歴史上、きわめて有益だったように思います。

最後に、今回のテキストが「ガイドブック」と銘打っているわけですから、みんなも単に「理解」とにとどめずに、理解した内容の「実践」にできるだけ努めましょう。